

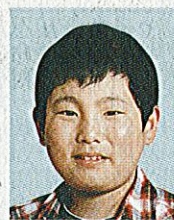
息子の死 深まる「なぜ」

石巻の女性 学校に不信感

あの子が生きていたら中学生。学生服の姿を見ることはない。東日本大震災で児童百八人のうち七十四人が犠牲となった宮城県石巻市の大川小学校。六年生だった長男大輔君（当時）（二）を亡くした今野ひとみさん（四）は息子の最後の言葉を知り、一年がたとうとしても悲しみと疑念が消えない。（柚木まり）



祭壇に向かって手を合わせる今野ひとみさんと夫の浩行さん＝宮城県石巻市で（内山田正夫撮影）



今野大輔君

台所に立つと腰に抱きつき、つまみ食いをする食いしん坊だった。「大ちゃん、ごはんいっぱい食べてる？何が食べたいの」。今もつぶやきながら、仮設住宅で料理を作る。夫浩行さん（五）と二人分のはずが、つい作りすぎてしまう。

昨年三月十一日。地震が起きると、大川小の教師は校庭に児童を四十分間待たせ、避難先を相談した。学校に近い橋の方へようやく移動を始めた直後、北上川を逆流する波にのまれた。十一人の教師も助かったのは一人だけだった。

大輔君は六日後、裏山のふもとで他の男子と折り重なるように見つかった。眠っているように、きれいな顔。今

再生への道

野さん宅も流され、家にいた高校三年の長女麻里さん（当時）（一）、二年の次女理加さん（二）

同（一）も、義父母も亡くした。「家族を失ったのはうただけじゃない。あきらめるしかねえんだな」。そう言い聞かせようとした時、助かった同級生から大輔君の言葉を聞いた。

「山に逃げっぺ」。

いつまでも決断できない教師に、学校の裏山に登るように言った。「先生も分らない」。答えに「先生にも分かんねえのか」と食い下がったという。

大川小は津波の避難訓練をしたことがなく、避難場所も決めていなかった。結局、山道のない裏山に登るのは危険と考え、津波が迫っていた川のそばへ

市教委と大川小は今一年一月の説明会で「一人の災の面もあった」とようやく認めたが、なぜ避難が遅れたか不明な点が多い。他の遺族と集まり、今も情報を集めている。

仮設住宅の居間には亡くなった家族五人の遺影が並ぶ。三月に大川小で開く慰霊祭に間に合うよう、写真の大輔君に学生服を着せるよう地元の写真店に頼んだ。

「私の中では大ちゃんはずっと小学生のまま。でも、いつまでも小学生じゃかわいそうだって。成長した姿、見たかったなあ」

石巻市の小中学校被災状況

